1	言語	名前

言葉の力をつけよう（音読３年①）

〔文語定型詩「初恋」〕

★ 言葉を豊かにするために、優れた文学作品を音読しましょう。日本語の美しいリズムや言葉の美しい響きを感じ取ることができるでしょう。朗読や暗唱にも挑戦してみましょう。言葉の意味を想像したり調べたりして味わいをさらに深めましょう。

やってみよう

◆ 五七調や七五調など、決まった音数律をもつ文語の詩を「文語定型詩」と言います。文語のもつ独特の響きや定型の音数律の奏でるリズムを味わいながら音読してみましょう。

初恋

島崎藤村

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこころなきためいきの
その髪の毛にかかるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畠の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

《口語訳》

初恋　島崎藤村

まだ結いあげ始めたばかりの前髪が
林檎の木の下の方に見えたとき
その前髪にさした花櫛の花ではないが
花のように美しい君だと思ったことだ。

やさしく白い手を差し伸べて
林檎を私に与えてくれたことが
薄紅に色付き始めた秋の実のように
あなたを恋しく思うはじめとなったのだ。

わたくしが思わずもらす恋のためいきが
あなたの髪の毛にかかる時
たのしき恋の盃を
あなたはわたくしへの思いやりでみたして
くれたのだよ。（あなたのおかげで私は恋の
盃を手にし、恋に酔いしれることができた
のだよ。）

林檎ばたけの木の下に
自然にできた細道は
いったい誰が通ってできた細道かしらと
尋ねなさるあなたが愛しくてたまらない。

《読んだ回数》

1回　2回　3回　4回　5回　何度も　合計　回

朗読　暗唱

1

言語

言葉の力をつけよう（音読3年②）

〔和歌「小倉百人一首」〕

名前

解説

★知っておきたい言葉の知識

「**和歌**」…日本古来の五音と七音をもとにした歌の総称で、長歌・**短歌**・**旋頭歌**などがあります。日本最古の和歌集として「**万葉集**」があります、最初の**勅撰和歌集**（天皇の命令で編まれた歌集）に「**古今和歌集**」があります。これに鎌倉時代の「**新古今和歌集**」をあわせて三大歌集と呼びます。三大歌集は和歌の歴史を知るのに特徴的な歌集です。

「**小倉百人一首**」…**藤原定家**の選んだ百人一首はほとんどが勅撰和歌集から選ばれており、その歌を詠んだ歌人の生きた年代順にならべられています。

身に付けると…

作品が成立した時代の歴史的背景や昔の人々のものの感じ方・考え方を知ることができます。
和歌の歴史を知り、表現の特色や味わいの豊かさを楽しむことができます。

読んでみよう

《口語訳》

① 秋の田に作ったの仮小屋で寝ていると、屋根や囲いの苫の編み目が粗いので、私の着物の袖は夜露に濡れ続けているよ。

② もう春は過ぎ、夏が来たようだ。虫除けのために衣を日に当てるというが、その白い衣が天の香具山に見えることだ。

40 心の中に隠していてはいるけれども、顔色に表れてしまったなあ、私の恋は。「あなたは物思いをしているのですか」と人が尋ねるほどに。

41 恋をしているという私の評判は早くも世間に広まったことだ。誰にも知られないように、密かにあの人を思い始めたのに。

60 大江山を過ぎて生野を越えて行く道が遠いので、まだ天の橋立へ行ってみたことはありません。もちろん、母の手紙も見ていません。

61 昔の奈良の都で咲いていた八重桜は、今日は京の都この宮中で色美しく咲いていることだなあ。

《エピソード1》

40 の平兼盛の歌と 41 の壬生忠見の歌は、天徳四年（九六〇年）三月三十日に行われた「天徳内裏歌合」での大一番でした。甲乙つけがたく判定に困った審判の藤原実頼が村上天皇をうかがったところ、天皇が低い声で「しのぶれど」の歌を吟じていたことから、兼盛を勝ちとしたそうです。壬生忠見は負けたことを気に病んでとうとう死んでしまったと言われています。（『**袋草子**』より）

当時の歌人にとって内裏で行われる歌合がどんなに大事なものであったかが分かりますね。歌合の結果は勅撰和歌集を作るときの参考資料にもなったようです。

《エピソード2》

60 の歌も歌合をめぐるエピソードをもっています。

小式部内侍は当時の有名な歌人、和泉式部の娘でした。京の都で歌合に出場する小式部内侍が、他の参加者から、丹後にいる母に頼んで代作してもらったその歌は、手元に届きましたかとからかわれて、即座に返した歌です。

「生野」と「行く野」、「踏み」と「文」を掛詞にし、倒置法で強調し、体言止めで余韻を残しています。歌枕を「大江山」「生野」「天の橋立」といくつも読み込み、技巧を駆使しながら、代作疑惑を一気に否定することのできる説得力のある歌でした。（『**十訓抄**』より）

《エピソード3》

61 の歌は、奈良から献上された桜を宮中に取り入れる役を紫式部から急に譲られた伊勢大輔が、藤原道長の前で見事に詠んだ歌です。「今日」と「京」、「九重」と「ここの辺」が掛詞になっています。（『**詞華集**』より）